デモティックにおける第2時制の文焦点化機能

On the Sentence-focalizing Function of the Second Tenses in Demotic

小山 彰^{*}
KOYAMA Akira

ABSTRACT This paper reconsiders the focalizing function of the Demotic second tenses (*i-ir=f sdm* [past/present], *i-ir=f (r) sdm* [future], and *i-ir hr sdm=f* [aorist]) in main clauses. In Demotic grammatical studies, it is generally stated that the second tenses are constructions with a focalized adverbial adjunct. This widely accepted analysis, however, does not account for all actual examples of the second tenses, because there are cases where there is no adverbial adjunct. Therefore, an alternative analysis which can explain such “exceptions” also is required.

By comparison with the analysis of the second tenses in Sahidic Coptic (cf. *BSNESJ* 56/2), another focus type, i.e., the sentence focus (one whose focus domain corresponds to a whole sentence), is considered as a possible solution to the problem. Therefore this paper considers the following hypothesis: The Demotic second tenses can serve a sentence-focalizing function as well as an adverbial-focalizing function.

In order to test this hypothesis, selected examples exhibiting three different structures are discussed: (1) examples with no adverbial adjunct (*Onchsheshonqy* 23, 14; *P. Cairo* 30692 12; *Setne II* 4, 27-28; *Demotic Chronicle* 4, 1); (2) examples with an adverbial adjunct (*Onchsheshonqy* 23, 7; *P. Cairo* 30692 12; *Setne II* 4, 17; *Demotic Chronicle* 5, 18 and 5, 19); (3) examples followed by a conjunctive (*Hermopolis Legal Code* 8, 13-14; *P. Jumilhac* 11, lower margin).

The results of the examination demonstrate that the second tenses had already gained the sentence-focalizing function at the stage of Demotic before Coptic.

I. はじめに

後期エジプト語を構成する新エジプト語、デモティック⁽¹⁾、コプト語の3つの言語段階には「第2時制(second tense)」と呼ばれる一群の構文が存在し、本稿の検討対象であるデモティックにおいては動詞形 *i-ir=f sdm* 等がそれに属する。この第2時制という汎後期エジプト語的な範疇の正しい理解に向けた道筋は、1944年に発表されたポロツキーの研究(Polotsky 1944, 21-96)によって示され、それ以降、それぞれの言語段階における第2時制の研究が進められてきた。しかしその進捗は一様ではなく、デモティックの第2時制に関する分析はその前後に位置する新エジプト語やコプト語と比較して滞った状況にあり、いまだ両者との体系的なすり合わせが可能なレベルには達していない。そのような背景のもとに本稿では、先行研究に対する問題提起、ならびに問題解決に向けての仮説の設定と検証という一連の作業を通して、デモティックの第2時制が主節において発現する機能に関する分析の深化を試みたい。⁽²⁾⁽³⁾

* 本学会会員

Member of the Society for Near Eastern Studies in Japan

(1) 用語「デモティック (Demotic)」は本来、文字を指す名称であるが、そこから転じてその文字で書かれた言語を指すこともできる (Depauw 1997, 19-21)。本稿では総じて、この用語を後者の意味で用いている。

(2) デモティックの第2時制は主節のみならず従属節としても用いられるが、本稿の議論の対象は主節としての用法に限定する。

II. 問題の在処

1. 先行研究の概要

デモティック文法の研究領域において動詞形 $i\text{-}ir=f sdm$ をはじめとする第2時制の構文に関する研究がこれまでに辿ってきた経緯について、年代を追って段階的に整理すれば以下のようになる。⁽⁴⁾

(1) 1925年に刊行されたシュピーゲルベルクによる古典的なデモティックの文法書では、動詞形 $i\text{-}ir=f sdm$ は「強調 $i\text{-}ir=f sdm$ 」という名称で扱われた (Spiegelberg 1925, 82-84)。その基本的な意味は強調的なものとされ、主節における用法として、命令 (§ 179)、語り (§ 181)、および格言 (§ 182) が挙げられている。

(2) 上記のようなそれまでの動詞形 $i\text{-}ir=f sdm$ の理解を根本的に見直すきっかけとなったのが、すでに言及した1944年のポロツキーの研究である。その画期的な研究で彼は、コプト語文法において伝統的に第2時制と呼ばれている一群の構文の本質的な機能が副詞類の焦点化にあることを立証し (Polotsky 1944, 21-68)、さらにコプト語に先行する言語段階である新エジプト語とデモティックでは、動詞形 $i\text{-}ir=f sdm$ がこの第2時制に対応する形式であることも論じた (Polotsky 1944, 69-96)。

(3) 上記のポロツキーの研究では、デモティックの第2時制に関しては少数の用例が散発的に引用されるにとどまっていた。しかしその後、彼の議論に触発されたウィリアムズがベルシア期からローマ期までをカバーする多くのテキストを調査し、デモティックにおける第2時制の様相を明らかにした (Williams 1948)。その成果の中には、デモティックにおける第2時制の形成法として、動詞形 $i\text{-}ir=f sdm$ を利用する新エジプト語以来の方法に並行して、無標の文の文頭に要素 $i\text{-}ir$ を付加する方法が現れて利用されるようになるという、共時と通時の両面において重要な知見も含まれている。

(4) 1976年にジョンソンは、1944年以降に進展した古代エジプト語文法の研究成果を反映するかたちで、プトレマイオス朝期とローマ期に属する4つのテキストをコーパスとしたデモティックの動詞体系の記述を提示した (Johnson 1976)。その中で彼女は第2時制を、その機能を厳格に副詞類の焦点化に結びつける方針のもとに、豊富な用例を引用しつつ包括的に分析している。⁽⁵⁾

(5) しかし1990年代後半になり、ポロツキーの理論、そしてそこから引き出されたジョンソンの分析に対する異論が提出された (Simpson 1996, 171-177; Widmer 1999)。その骨子は、デモティックにおける第2時制の用例全体を副詞類の焦点化という単一の機能のもとに括することはできないというものであり、具体的な事例として指令法的な用法や注釈の用法などが取り上げられた。その後、この異論に対して肯否両方の意見が (主にシンプソンへの反応として) 出されたものの、⁽⁶⁾ それ以降、この問

(3) デモティック原文の引用にあたっては Johnson 2000, 2-4 の翻字システムに準拠しているが、例外として当該システムの q に替えてここでは k を用いている。なお、本稿で引用あるいは言及するデモティック・テキストの典拠は以下の通りである。オンクシェションキの教訓=Glanville 1955; 第1セトネ物語=Goldbrunner 2006; 第2セトネ物語=Griffith 1900; デモティック年代記=Spiegelberg 1914; パピルス・アシュモレアン 1984.77 Verso=Jasnow 1991; パピルス・カイロ 30692=Spiegelberg 1906-08, 112-115, Taf. 51; パピルス・ジュミアック=Vandier 1961; ヘルモポリス法典=Mattha and Hughes 1975。

(4) もちろんこれは網羅的なものではなく、本稿における議論の位置づけを確認するのに必要な内容に絞っている。

(5) 第2時制に関する記述がなされている主な箇所は以下の通りである。Johnson 1976, 99-126 [66-83], 129 [85], 137 [88], 138 [90], 142 [93], 159-162 [104-105], 167 [109], 186-187 [120-121], 194 [126], 198 [129], 202-203 [131], 248-250 [159-160], 285 [183]。(角カッコ内の数字は判型が変更された第2刷 (2004年) でのページ番号を示している。以下の同書への参照指示についても同様。)

(6) 肯定的な評価については Shisha-Halevy 1998, 597-598; 2002, 333 n. 56; Jansen-Winkel 1999, 105-106 を、また否定的な評価については Quack 1997/98, 177; 2006, 260; Depuydt 1998, 60-61 を参照。

題は議論の進展がないまま現在に至っている。

以上のような先行研究の状況において本稿が立脚するのは、デモティックの第2時制が副詞類の焦点化以外の機能を内包していることを肯定する立場である。したがって以下での問題提起にあたっては、この立脚点と対立するジョンソンの分析を議論の対象として取り上げる。

2. ジョンソンによる第2時制の分析

問題提起に先立ち、ジョンソンによってなされたデモティックの第2時制の分析内容について、その要点を確認しておきたい。⁽⁷⁾

i) 第2時制の形態統語的特徴

デモティックの4つの時制（過去，現在，未来，アオリスト）⁽⁸⁾における無標の文とそれに対応する第2時制の一般的な形を，3人称・男性・単数の人称代名詞（*iw*）⁽⁹⁾=*f*「彼」と動詞（不定詞）*sdm*「聞く」を用いて例示すれば以下⁽¹⁰⁾のようになる。

表1 各時制における無標および第2時制の形式

	無標	第2時制
過去	<i>sdm=f</i> （「彼は聞いた」）	<i>i-ir=f sdm</i>
現在	<i>iw=f sdm</i> （「彼は聞く」）	<i>i-ir=f sdm</i>
未来	<i>iw=f (r) sdm</i> （「彼は聞くだろう」）	<i>i-ir=f (r) sdm</i>
アオリスト	<i>hr sdm=f</i> （「彼は（通常）聞く」）	<i>i-ir hr sdm=f</i>

このようにデモティックの第2時制は，文頭の要素 *i-ir*（変異形：*r-ir*）によって形態統語的に特徴づけられている。

ii) 第2時制の機能

デモティックの第2時制が担っているのは，文の情報構造に関わる機能である。具体的には文の内部に含まれるいずれかの副詞類を焦点化する，⁽¹¹⁾換言すればいずれかの副詞類が聞き手／読み手にとって特に高い情報価値を有していることを標示する機能を第2時制は有している。たとえば例文1の第2時制の文では，疑問代名詞 *ih*「何？」を含む前置詞句 *r-dḅ ih*「どうして？」（逐語訳：「何のゆえに？」）が焦点化されている。

【例文1】第1セトネ物語 3, 11

(7) ジョンソンの分析には第2時制の統語構造に関する内容も含まれているが，それについてはここでは触れない。

(8) ギリシア語文法での場合とは異なり，ここでいう「アオリスト」の動詞形は，普遍的，習慣的，あるいは反復的な（したがって「時に関して定められていない」）行為や事柄を表わすのに用いられる（Johnson 1976, 8 [5-6], 137-140 [90-91]）。

(9) 現在時制の無標の文においては *iw=f*，それ以外では *=f* の形態をとる。（なお未来時制の無標の文に対する例では，構文自体に属する文頭の要素 *iw* に代名詞 *=f* が付加されている点に注意されたい。）

(10) 過去，現在および未来時制の第2時制形に関しては Johnson 1976, 99-102 [66-68] を，アオリストの第2時制形に関しては Johnson 1976, 138 [90] を参照。

(11) ジョンソン自身の記述では「副詞的付加詞を強調する」（Johnson 1976, 107 [71]）。

i-ir=k sby n-im=y r-db³ ih
 「『あなたはどうして私を笑っているのか?』」⁽¹²⁾

3. ジョンソンの分析を逸脱する第2時制の用例

先行研究の説明の際に言及したように、ジョンソンはデモティックの第2時制の機能を副詞類の焦点化に限定する立場をとり、そのためそこから引き出される帰結に相当する以下の見解を述べている。「すべてのケースにおいて、第2時制節は副詞的付加詞と呼ばれる何らかの副詞類によって後続される」(Johnson 1976, 107 [71])。

しかしド・セニヴァルによって批判されているように (de Cenival 1980, 94), この主張は過度な一般化をとまなっている。なぜならばそれを逸脱する、すなわち副詞類をとまなわない第2時制の用例が、出現する頻度は低いながらも確かに存在するためである。⁽¹³⁾ 実際、ジョンソン自身もそのような事例の存在を認識しており、例文2に示すオンクシェションキの教訓からの用例に言及している (Johnson 1976, 112 [74] E190)。

【例文2】オンクシェションキの教訓 23, 14

〔文脈〕オンクシェションキが書き記した格言。

「すべての手が神へ伸ばされる」

i-ir=f šp dr.t p³y=f mr.t (命題内容:「彼が彼の愛する者の手を受け入れる」)⁽¹⁴⁾

さらに同様な事例として、ジョンソンが分析に利用したコーパスに含まれていないテキストから、以下のものを挙げることができる。

【例文3】パピルス・カイロ 30692 12⁽¹⁵⁾

〔文脈〕いわゆる「セトネ物語」に属する物語テキスト: セトネがメンフィスの墓地にある墓の中で幽霊に出会った場面。

「幽霊はセトネと話をしました。セトネは言いました。『おお、彼がラーの生涯と持続をなしますように!』」⁽¹⁶⁾ [……] …」

i-ir=f swr wnm (命題内容:「彼 [=幽霊] が飲んで食べた」)

【例文4】第2セトネ物語 4, 27

〔文脈〕不可解なファラオの発言に対する評議員たちの反応。

「(評議員たちは心の中で言った。)『ひょっとしてファラオの正気が去ったのか』。彼らは(ファラオに)言いました」

i-ir=k wd³ (命題内容:「あなたが健全である」)

【例文5】デモティック年代記 4, 1

〔文脈〕談話の引用とそれに対する注釈。

「『最初の者』」

i-ir=f d mh 1 i-ir iy m-s³ n³ Mty.(w) (命題内容:「彼が『メディア人たちの後に来た最初の者』と述」)⁽¹⁷⁾

(12) 邦語訳の下線部は焦点の範囲を示している (以下の例文においても同様)。

(13) この点に関しては Widmer 1999, 181 も参照。

(14) この格言はパピルス・アシュモレアン 1984.77 Verso 1, 10 にも残されている (Jasnow 1991, 45)。

(15) 当該箇所を読みに関しては Zauzich 1976 を参照。

(16) 挨拶の言葉 (Zauzich 1976, 80 c)。

べている」)

これらのような副詞類をとみなわない第2時制の用例に対しては、当然ながら副詞類の焦点化という機能を作用させることはできない。そのためジョンソンは例文2が有するこの問題点へ対処する方策として、本来は副詞類に割り当てられる焦点を副詞類以外の構成要素に付け替える破格な分析を提示し、以下に示す2つの解釈の可能性を挙げている。

解釈1：直接目的語の *dr.t pʒy=f mr.t* 「彼の愛する者の手」が焦点

“He accepts only the hand of his beloved” (Johnson 1976, 112 [74] E190)

解釈2：属格の *(n) pʒy=f mr.t* 「彼の愛する者の」が焦点⁽¹⁸⁾

“It is only of his beloved that he accepts the hand” (Johnson 1976, 112 [75] n. 194)

しかし上記のような焦点を付け替える分析は、他の類例を考慮にいれた場合に齟齬を生じる。たとえば例文3の用例に対してその分析を適用した場合、代名詞主部 (=f「彼」) か動詞 (*swr wnm* 「飲んで食べる」) のどちらかに焦点が割り当てられることになるが、物語の地の文に属するこの第2時制が置かれた文脈では、これらの要素へ特に高い情報価値の付与を要求するような動因はみとめられない。このことはつまり、副詞類をとみなわない第2時制の用例において作用している機能が、副詞類以外の構成要素への単なる焦点の付け替えとは異なる可能性を示唆している。

したがって本稿の課題は、副詞類をとみなわない第2時制の用例が担っている機能を異なるアプローチから再検討し、さらにそれを足がかりとしてデモティック文法における第2時制の理解のありかたを刷新することにある。

III. 課題達成のための方法

1. コプト語サイド方言の第2時制が示す2つの焦点タイプ

前節で設定した課題を達成するのに有効な手がかりは、ポロツキーの研究以降さらに分析が進められてきた、コプト語の第2時制が有する焦点化機能に求めることができる。そこで本節では、コプト語の主要な方言であるサイド方言の第2時制を取り上げてその機能を概観し、次節で実施する仮説の設定に向けての準備としたい。⁽¹⁹⁾

コプト語サイド方言の第2時制が内包する焦点化機能は、焦点化される範囲に応じて2つのタイプに分類されることができる。第1のタイプは、文の構成要素に焦点が置かれるものである。これはランブレヒトによる焦点タイプの分析 (Lambrecht 1994, 221-238) における「項焦点 (argument focus)」に相当し、日本語では「スコープの『の(だ)』」(野田 1997, 31-59) が機能的に対応する構文である。⁽²⁰⁾

【例文6】師父たちの金言 no. 181, 7

ekbèk etôn (第2時制 [現在])

「おまえはどこへ行くのか？」(スコープの「の(だ)」)

この用例では疑問副詞句 etôn 「どこへ？」が文の焦点であるが、このようにサイド方言の第2時制

(17) 第28王朝の王であるアミルタイオスを指す。

(18) パピルス・アシュモレアン 1984.77 Verso 1, 10 では属格の *n* が書かれている。

(19) コプト語原文の引用にあたっては Grossman and Haspelmath 2015 の翻字システムを用いる。また本節で引用するサイド方言版の「師父たちの金言 (Aphthegmata Patrum)」の原文は Chaîne 1960 による。

(20) このタイプの焦点化機能に関しては Layton 2011, 353-359 を参照。なおレイトンは、第2時制に替えて「焦点化転換 (focalizing conversion)」という用語を用いている (この点については以下で挙げる小山 2013 も同様)。

においては副詞類が最も頻繁に焦点化の対象となる。しかしそれと並行して副詞類以外の構成要素の焦点化も許容されており、たとえば以下の例文 7 と 8 ではそれぞれ主部と直接目的語の位置に入った疑問代名詞 ou 「何？」が焦点である。⁽²¹⁾

【例文 7】師父たちの金言 no. 247, 4

nta ou šôpe paeiôt (第 2 時制 [過去])

「何があったのですか、我が父よ？」

【例文 8】師父たちの金言 no. 239, 5

etetnnar ou naf (第 2 時制 [未来])

「あなたたちは彼に何をするのか？」

サイド方言において第 2 時制が有している焦点化機能の第 2 のタイプは、焦点の範囲が文全体に及ぶものである。⁽²²⁾これは上記のランプレヒトの分析における「文焦点 (sentence focus)」に相当し、日本語では「ムードの『のだ』」(野田 1997, 61-104) が機能的に対応する構文である。そしてこの文焦点化の機能が有する最大の特徴は、文脈等に応じて極めて多様な用法を産出する点にある。

【例文 9】師父たちの金言 no. 225, 11-13

〔文脈〕マカリオスが泣き続ける老婦人を呼び寄せた。

「彼女が来ると長老は彼女に言った。『なぜ、あなたはずっと泣いているのか？』彼女は彼に言った」

nta pahai mou eafci noucoile nte oua auô mpefçooš efnamou çe ntafkaaf tôn (第 2 時制 [過去])

「『私の夫がある人から預かり物を受け取った後に死んで、それをどこに置いたのかを死ぬ間際に言わなかったのです』」(ムードの「のだ」)

この用例では質問者に対して泣いている原因・理由を提示するために、話し手が第 2 時制の文焦点化機能を利用している。それに対して以下の 2 つの用例では、第 2 時制の使用によってそれぞれの発話に「告白」と「切望」のニュアンスが付与されている。

【例文 10】師父たちの金言 no. 101, 19

〔文脈〕マカリオスが自分を妊娠させたと主張していた女性が告白した内容。

「『隠遁者は私と何ともありません』」

alla ntaiçicol erof (第 2 時制 [過去])

「『そうではなく、私が彼に対して嘘をついたのです』」

【例文 11】師父たちの金言 no. 239, 7-8

〔文脈〕異国の 2 人の若者がマカリオスに会うために彼の住むスケーティスに来た。彼らが本人と知らずに声をかけたマカリオスにその旨を述べると、彼は自分が当人であると彼らに告げた。

「彼らは私 [=マカリオス] に平伏して言った」

enouôš ehmoos mpeima (第 2 時制 [現在])

「『私たちはここに留まりたいのです』」

(21) このような主部や直接目的語の位置に疑問代名詞が入った第 2 時制の wh-疑問文は、コプト語の段階から出現する点に留意されたい。

(22) このタイプの焦点化機能に関しては小山 2013 を参照。

2. 仮説の設定

前節では、コプト語サイド方言の第2時制の焦点化機能が「項焦点」と「文焦点」という2つの焦点タイプに分類されることを見た。この分類を用いて先の問題提起の内容を再度整理すれば、「ジョンソンはデモティックの第2時制の焦点化機能を項焦点に結びつけ、通常は特権的に副詞類に、それが存在しない場合には例外的に他の構成要素に焦点を配する分析を提示したが、副詞類をともなわない用例の検討結果はこの分析に対して再考を促す」とまとめられる。そしてこの問題点を解決するための鍵として、本稿ではこれまで考慮されることのなかったもう一つの焦点タイプである文焦点に着目し、それを組み入れた以下の仮説をここで設定する。

仮説：「デモティックの第2時制は、副詞類を焦点化する項焦点化機能に加え、文全体を焦点化する文焦点化機能も併せ持つ」

コプト語サイド方言に関して前節で確認した内容をふまえてこの仮説を敷衍するならば、「デモティックの第2時制には、従来知られていた副詞類に特化した項焦点化の機能のみならず、文脈等に応じて多様な用法の産出を可能にする文焦点化の機能が共在し、後者の解釈をとる第2時制の文は総じてムードの『のだ』によって適切に日本語に訳出される」ということになる。

IV. 用例分析

本節では具体的な用例の分析を通して、先に設定した仮説の検証を実施する。はじめに問題提起の際に取り上げた副詞類をともなわない第2時制の用例を検討し（1節）、つづいて副詞類をともなう用例へ分析の対象を拡大する（2節）。そして最後に、接続形（conjunctive）によって後続された第2時制の用例について検討を行う（3節）。

1. 副詞類をともなわない第2時制

本稿で設定した仮説を前提とするならば、副詞類をともなわない第2時制の用例は一意的に文焦点の解釈をとり、したがってムードの「のだ」で適切に訳出されうると予測される。そこで本節ではこの予測の具体的な裏付けを行うため、例文2～5の用例にムードの「のだ」による邦語訳を付したものを例文12～15として再掲⁽²³⁾し、その邦語訳が個々の文脈に適合する許容可能なものであることを確認していく。

【例文12】オンクセッションキの教訓 23, 14

「すべての手が神へ伸ばされる」

i-ir=f šp dr.t p̣y=f mr.t

「(だが) 彼は彼の愛する者の手を受け入れるのである」

ここで第2時制が用いられているのは格言の後半を構成する文であるが、上に示したムードの「のだ」による邦語訳は文脈的に許容可能なものであり、この文を文焦点化する意図は、格言前半で示された状況と齟齬する事態の際立たせに求めることができる。

【例文13】パピルス・カイロ 30692 12

「幽霊はセトネと話をしました。セトネは言いました。『おお、彼がラーの生涯と持続をなしますようにに！』[……] …」

(23) ただし例文4については、文意を明確にするために原文を補って例文14に再掲する。

i-ir=f swr wnm

「(そして) 彼は飲んで食べたのでした」

この用例の第2時制は物語の地の文で用いられているが、それと対比することのできるムードの「のだ」として、書きことばで用いられて「物語的過去」の用法を示すタ形の「のだった」が存在する(野田 1997, 102-103)。実際、その変異形を用いた上記の邦語訳は妥当なものであり、そこで文焦点化が果たしている役割は、物語の進行にともなって生じた新たな事態の認識を聞き手／読み手に対して積極的に促すことにありと理解される。

【例文14】第2セトネ物語 4, 27-28

「『ひょっとしてファラオの正気が去ったのか』。彼らは言いました」

i-ir=k wd i-ir=k wd [p] Pr-3 p3y=n nb 3

「『あなたは健全であるのです！ あなたは健全であるのです！ [おお] ファラオ、我らの大いなる主よ！』」

物語内の会話文に連続して現れるこの第2時制の発話には、ファラオに正気をとりもどさせようとする話し手の態度が反映されていると文脈から判断される。そして上記のムードの「のだ」による邦語訳からは、それに適う(上位の者に対する丁寧な)命令のニュアンスをとともなう⁽²⁴⁾解釈を引き出すことが可能である。⁽²⁵⁾

【例文15】デモティック年代記 4, 1

「『最初の者』」

i-ir=f d mh 1 i-ir iy m-s3 n3 Mty.(w)

「彼は『メディア人たちの後に来た最初の者』と述べているのである」

この用例の第2時制は「注釈」、すなわち先行する引用された談話についての説明を行う部分で用いられている。他方、ムードの「のだ」もいわゆる説明の用法を有することから(野田 1997, 95)、ここでも後者を用いて前者を邦語訳することが可能となる。

以上本節では、問題提起の際に取り上げた副詞類をとともわなない第2時制の用例について検討した。その結果、それらは総じてムードの「のだ」によって適切に翻訳されることが可能であり、先に設定した仮説を支持することが確認された。

2. 副詞類をとともなう第2時制

前節では副詞類をとともわなない第2時制の用例を扱ったが、文焦点化の機能は本来、副詞類の有無に関係なく文に対して作用する性質のものである。そこで本節では副詞類をとともなう第2時制の用例を検討対象とし、それらに対しても本稿の仮説が成り立つこと、つまりそれらの中に文焦点の解釈をとるのが含まれていることを確認する。具体的には前節での議論を引き継ぐかたちで、例文12～15で検討した第2時制の用例に並行する、すなわち同一テキスト内に存在し、かつ同一の用法に属すると判断される、副詞類をとともなう第2時制の用例を抽出して検討する。

(24) 意識：「『しっかりなさるのです！ しっかりなさるのです！ おおファラオ、我らの大いなる主よ！』」

(25) なおウィドマーも、指令的な意味をとともなう第2時制の用例としてこの文を扱っている(Widmer 1999, 180-181)。

i) オンクシェションキの教訓：格言

オンクシェションキの格言を集成した部分（第6～28欄）には、例文12以外にも格言を構成する主節が第2時制である文が多数含まれているが、その中には副詞類ではなく文全体を焦点化することで格言としてより妥当な解釈を得られるものが存在する。

【例文16】 オンクシェションキの教訓 23, 7

「夫を持つ女性を愛するな」

p³ nt mr shm.t iw wn mtw=s hy i-ir=w htb.t=f hr by=s pn^c.t

「夫を持つ女性を愛する者は彼女の戸口で殺されるのである」

冒頭の否定命令の内容からわかるように、ここに記されているのは不義を戒めることを主題とした格言であり、その後半部分で第2時制を用いている。ジョンソンの分析によれば、当然ながら唯一の副詞類である前置詞句 *hr by=s pn^c.t* 「彼女の戸口で」がこの文の焦点となる（Johnson 1976, 106 [71] E173; 2000, 74 E169）。しかしながら実際のところ、そのような解釈では不義を戒める格言として収まりが悪いことは否めない。⁽²⁶⁾

それに対して文焦点化の機能をこの文に適用した上記の邦語訳からは、既婚女性を愛するという行為の報いに相当する悲劇的な結果を際立たせる、この格言の主題に即した適切な解釈を引き出すことが可能である。

ii) パピルス・カイロ 30692：物語的過去

例文13で扱った副詞類をとみなわない第2時制の文の後には、同じく第2時制の文が今度は副詞類をとみなったかたちで続いている。

【例文17】 パピルス・カイロ 30692 12

i-ir=f swr wnm i-ir=f hms (r) hrwt^c ny

「(そして) 彼は飲んで食べたのでした。 (そして) 彼はすばらしい祝祭に座したのでした」

連続するこの2つの文は、物語の地の文を構成する第2時制である点と、主部として男性名詞 *mt h-nt* 「幽霊」を指示する3人称・男性・単数の代名詞を有する点で共通している。したがって、前節で検討したように副詞類をとみなわない最初の第2時制が文焦点化の機能に基づく物語的過去の用法に相当するのであれば、それに続く副詞類をとみなう第2時制が同じ用法を継続している蓋然性は高いと考えられる。そしてそのような分析の妥当性については、上記の邦語訳のように、後者もムードの「のだ」のタ形によって有標の地の文として適切に訳出されるという事実から裏付けられる。

iii) 第2セトネ物語：命令

例文14は命令的に利用された2人称・男性・単数の代名詞を主部とする第2時制の用例であったが、同じ第2セトネ物語には2人称・複数の代名詞を主部とする、以下のような副詞類をとみなう第2時制の用例が存在する。

【例文18】 第2セトネ物語 4, 16-17

〔文脈〕ヌビアの呪術師がロウを用いて輿と4人の担ぎ手を作り出し、呪文を唱えて彼らに生命を与え

(26) 参考として、ハ分裂文により前置詞句を焦点に配した邦語訳「夫を持つ女性を愛する者が殺されるのは、彼女の戸口である」を考え合わせたい。

た。

hn=f s n=w d i-ir=tn šm r hry r Kmy i-ir=tn in Pr-⁽²⁷⁾ n Kmy r hry r p³ m^{3c} nt iw p³ kwr n-im=f

「彼は彼らに命令しました。『おまえたちはエジプトまで行くのだ。(そして) おまえたちはエジプトのファラオを(ヌビアの)支配者がいる場所まで連れて来るのだ』」

呪術師の発言を導入している地の文の動詞が *hn* 「命令する」であること、ならびに主部が2人称であることを考え合わせれば、この用例の2つの文は命令を表現していると考えられる。⁽²⁷⁾ したがってここで第2時制が担っている役割は、例文14の場合と同様に、文全体の焦点化による命令的なニュアンスの付与にあるものと理解される。⁽²⁸⁾

iv) デモティック年代記：注釈

例文15は動詞 *d* 「言う」を用いた第2時制のフレーズ (*i-ir=f d*) からなる注釈の文であったが、同じデモティック年代記のテキストには上記のフレーズが副詞類をとまって、引用された談話に対する注釈に現れる用例も存在する。⁽²⁹⁾

【例文19】デモティック年代記 5, 18

「『おお庭師、あなたの仕事をせよ！』すなわち、ファラオ、⁽³⁰⁾あなたの仕事をせよ！」

i-ir=f d n-im=s (n) Pr-⁽²⁹⁾ Nht-nb=f d t³y=f wpe ⁽³¹⁾šf^c

「彼はファラオ、ナクトネブエフ [=ネクタネボ1世] ⁽³¹⁾について、すなわち彼の貪欲の仕事(について)、それを述べているのである」

【例文20】デモティック年代記 5, 19

「『おお庭の監督者、あなたの垣根が立つようにさせよ！』」

i-ir=f d n-im=s n=f^c n

「彼は再び彼 [=ネクタネボ1世] についてそれを述べているのである」

同じテキストにおいて等しい用途に同一のフレーズを利用していることから類推すれば、これらの第2時制が例文15と同様に文焦点化の機能に基づく説明的な用法に相当する蓋然性は高いであろう。他方でムードの「のだ」を用いた上記の邦語訳に注目すると、そこから引き出される最も自然な解釈もやはり、引用された談話の対象に関して説明を提示するニュアンスを帯びたものである。したがってそれらの点を考え合わせれば、例文19と20の用例は文焦点に結びつけられるのが妥当であると判断される。

本節で検討した結果を総合すれば、本稿の仮説で設定した文焦点化機能は、副詞類をとまなわない場合に限らず、副詞類をとまなう第2時制の用例もその適用範囲に含んでいると結論される。

(27) この用例を命令表現として理解することについては、Spiegelberg 1925, 83; Williams 1948, 225 も参照。

(28) なおこの用例に関しては、不定詞+副詞類からなる動詞句全体が焦点化されているとみなす分析もある(Shisha-Halevy 1989, 33-35 [ex. 6])。

(29) 以下の2つの用例についてはWidmer 1999, 187 も参照。

(30) ジョンソンによれば、ここでの「庭師 (*kšmy*)」と「ファラオ」の対応には、*kšm* 「庭」と *Kmy* 「エジプト」の語呂合わせが関係している(Johnson 1983, 67)。(次の例文20における「庭の監督者 (*hry kšm*)」についても同様。)

(31) 動詞 *d* + 前置詞 *n* の動詞句が「～について言う」という意味を表わすことについては、Vinson 2010, 466-467 を参照。

3. 接続形によって後続された第2時制

後期エジプト語には接続形と呼ばれる動詞形が存在し、デモティックでは *mtw* + 主部 + 不定詞 [+副詞類] という統語構造をとる。デモティックにおける接続形の主な用法は、接続形が他の動詞形に後続して用いられることにより、前者が後者を延長する役割を担うものである。⁽³²⁾ たとえば以下の例では、先頭に位置している動詞 *tī* 「与える、～させる」の命令形 *my* を3つの接続形が延長している。

【例文21】第1セトネ物語 6, 4-5

〔文脈〕セトネに対してナネフェルカプタハが、コプトスに埋葬されている彼の妻と息子をメンフィスにある彼の墓へ移すように頼んでいる。

my ḥn=w s i-ir-ḥr=k mtw=k šp w.t ḥyy.t mtw=k šm r Kbt mtw=k [in.t=w] r bw-n)y

「『おまえの前で命じられるようにし、労をとり、コプトスへ行き、[彼らを]ここへ[連れて来]てくれ!』」

接続形は第2時制の文に後続して用いられることで、それを延長することもできる。後期エジプト語全体を対象として接続形に後続された第2時制の用例を検討したドピュイは、そのような文では第2時制もしくは接続形の一方の節に含まれる1つの副詞類だけが焦点化されると分析している (Depuydt 1993, 14-34)。しかしながら本稿で設定した仮説に基づくならば、接続形によって延長された第2時制の用例の中にも文焦点の解釈をとる場合のあることが予測される。本節ではこの点について検証するため、「ヘルモポリス法典」と「パピルス・ジュミアック」の2つのテキストから抽出した用例を取り上げる。

i) ヘルモポリス法典：法令の記述

このデモティック・テキストは法のマニュアルに位置づけられる文書であるが、ここで検討するのは⁽³³⁾ 塀の所有権に関する隣人間の係争を扱った部分に含まれる用例である。

【例文22】ヘルモポリス法典 8, 13-14

〔文脈〕ある者が塀の帰属に関してある者を訴え、双方とも自分の所有権を主張する場合、もしそれが裁判官たちのいる町でのことであれば、彼らが実地見分したうえで「それは某のものである」という決定を発する。

i-ir=w tī s n p) r-d=w d mtw=f s mtw=w tī sh n=f p)y=f iry-d [n] wy r-r=s

「それ [= 塀] は『それは彼のものである』と言われた者に与えられて、彼の訴訟相手が彼に対してその放棄（証書）を書くようにされるのである」

このテキストの刊行に携わったヒューズは、当該箇所に対する注においてこの用例を “It is to him of whom they have said, ‘It is his’, that it is given, and his adversary is required to write for him a quitclaim regarding it” と訳している (Mattha and Hughes 1975, 112)。したがって彼の分析では、第2時制の節に含まれる与格が⁽³⁴⁾ 焦点化されていることになる。

しかしながら解釈の妥当性という観点からみた場合、この分析には疑問の余地がある。なぜならこの

(32) デモティックの接続形に関しては Johnson 1976, 281-296 [181-190]; 2000, 85-86; Simpson 1996, 124-126 を参照。

(33) 以下の用例を含む段落の読解に関しては、Pestman 1985, 128-133 [Cas 2] を参照。

(34) 焦点化された副詞類の位置と機能に基づくドピュイのタイプ区分 (Depuydt 1993, 17-23) と照らし合せれば、この分析はタイプ I.A. (焦点化された副詞類が第2時制の節に属して第2時制の動詞のみを修飾) に相当する。

図1 パピルス・ジュミアック第11葉の挿絵部分 (Vandier 1961, pl. XI)

第2時制の節が表示する「所有権を認められた者に屏が与えられる」⁽³⁵⁾という処置は、先行文脈における裁判官の決定に応じたいわば必然的な対処であることから、ここで与格をことさらに焦点化する必要性は低いのである。

他方、本稿の仮説に基づいた場合には、上記のような問題点を抱えた分析に替えて、第2時制+接続形の全体を焦点範囲とする文焦点の文としてこの用例を分析することが可能である。そしてその分析によればこの文からは、上記のムードの「のだ」を用いた邦語訳から了解されるように、訴訟の当事者双方⁽³⁶⁾に対する最終的な処置を規定ないし指示する、文脈に適合した妥当な解釈が引き出されることになる⁽³⁶⁾。

ii) パピルス・ジュミアック：聖刻文字で記された文書に対する書き込み

パピルス・ジュミアックの本文には、上エジプト第18州の宗教的伝統における神話と伝説が筆記体の聖刻文字を用いて古典的なエジプト語で書かれており、一部に挿絵をとまっている。他方、その余白の部分には処々にデモティックの書き込みがなされていて、第11葉の挿絵の下⁽³⁷⁾の余白には以下のようなアオリストの第2時制と接続形からなる文が書かれている(図1)。

【例文23】パピルス・ジュミアック 第11葉，下側余白

i-ir hr hr p³ .wy 3by hry irm n3y=f sh.w mtw p³ tw n sm iy hry irm n3y=f sh.w

「豹の家がその筆記とともに上にあって、セム神官の像がその筆記とともに下に来るのである」

ツァウツィヒが指摘したように (Zauzich 1974, 160)，「豹の家 (p³ .wy 3by)」はこの文の上に描かれたアヌビスと豹の絵を、また「セム神官の像 (p³ tw n sm)」は余白に描かれた神官姿のアヌビスの絵⁽³⁸⁾

(35) 原文の語句 p³ r-d=w d mtw=f s 『それは彼のものである』と言われた者は、男性・単数の定冠詞 p³ をともなう定名詞句である点に留意されたい。

(36) この用法に類するものとして、カノプス勅令において副次的な規則を表現するのに用いられている、「指令法第2時制」(Simpson 1996, 174-176 [exx. vi-ix]) が挙げられる。

(37) この用例の読みに関しては Zauzich 1974, 160 を参照。

を、それぞれ指していると考えられる。したがってこの文の意味内容を敷衍すれば、前者の絵とそれに付随するテキストが上にある枠内の空白部に移って、下の空いた場所に後者の絵とそれに付随するテキストが来る、ということになる。

このことをふまえるならば、第2時制と接続形からなるこの文の焦点がドピュイの分析にしたがって副詞類のいずれかに置かれているとは考えがたい。むしろ上記の邦語訳のように意味内容全体を焦点化することにより、乱れた状態にある挿絵の本来のあり方を提示して説明するという、ツァウツィヒがこの文に対して想定している「挿絵に対する訂正のメモ」(Zauzich 1974, 161)の役割に適った解釈を引き出すことが可能となる。⁽³⁹⁾

以上の議論から、接続形によって後続・延長された第2時制の用例に対しても、本稿で設定した仮説は適用可能であることが明らかとなった。

V. 結 論

第IV節では、まず副詞類をとみなない用例を起点とし、次いで副詞類と接続形によって統語構造を順次拡張する方向で、デモティックの第2時制の用例分析を展開した。そしてそれらの分析結果はいずれも、本稿で設定した「デモティックの第2時制は、副詞類を焦点化する項焦点化機能に加え、文全体を焦点化する文焦点化機能も併せ持つ」という仮説を支持するものであった。したがって前節でなされた論証によって、当該仮説は検証されたと結論づけられる。

これまでデモティックの主節に現れる第2時制に関しては、ポロツキーの研究成果を取り入れるかたちで、それが副詞類の焦点化という単一の機能を担うとする見解が広く受け入れられてきた。しかしその一方で、そのような単純な分析では不十分であるとの異見も出されていた。本稿では後者に与する立場から改めて問題提起を行い、後期エジプト語の第2時制はコプト語に先行するデモティックの段階ですでに文焦点化の機能も獲得していたこと、そしてその機能を活用することで多様な用法がデモティック・テキストにおいて実現したことを明らかにした。

参考文献

- Cenival, F. de 1980: "Le système verbal démotique," *Chronique d'Égypte* 55, 87-101.
Chaîne, M. 1960: *Le manuscrit de la version copte en dialecte sahidique des "Apophthegmata Patrum"*, Le Caire.
Depauw, M. 1997: *A Companion to Demotic Studies*, Brussels.
Depuydt, L. 1993: *Conjunction, Contiguity, Contingency: On Relationships between Events in the Egyptian and Coptic Verbal Systems*, Oxford.
Depuydt, L. 1998: "On the Grammar of Demotic Sacerdotal Decrees," *Chronique d'Égypte* 73, 54-65.
Glanville, S. R. K. 1955: *The Instructions of 'Onchsheshonqy (British Museum Papyrus 10508)*, London.
Goldbrunner, S. 2006: *Der verblendete Gelehrte: Der erste Setna-Roman (P. Kairo 30646)*, Sommerhausen.
Griffith, F. Ll. 1900: *Stories of the High Priests of Memphis: The Sethon of Herodotus and the Demotic Tales of Khamuas*,

(38) この絵の左側に付随する筆記体聖刻文字で書かれたテキストには、「セトはその姿を豹にした。アヌビスは彼を炎で焼き、彼に彼の焼印をした。豹はそのために存在する」とある（このテキストに関しては Vandier 1961, 140, 249 を参照）。

(39) なおツァウツィヒは、第2時制であることに特に留意することなく、アオリストが命令的な意味においても使用されうることに基づいて（Zauzich 1974, 159）、この文に“Das Haus des Panthers soll mit seinen (Bei)schriften oben sein, und die Figur des Sem-Priesters soll nach unten kommen mit ihren (Bei)schriften”という訳を与えている（Zauzich 1974, 160）。

- Oxford.
- Grossman, E. and M. Haspelmath 2015: "The Leipzig-Jerusalem Transliteration of Coptic," in E. Grossman et al. (eds.), *Egyptian-Coptic Linguistics in Typological Perspective*, Berlin, 145-153.
- Jansen-Winkeln, K. 1999: Review of R. S. Simpson, *Demotic Grammar in the Ptolemaic Sacerdotal Decrees*, *Discussions in Egyptology* 44, 97-107.
- Jasnow, R. 1991: "A Demotic Wisdom Papyrus in the Ashmolean Museum (P. Ashm. 1984.77 Verso)," *Enchoria* 18, 43-54.
- Johnson, J. H. 1976: *The Demotic Verbal System*, Chicago.
- Johnson, J. H. 1983: "The Demotic Chronicle as a Statement of a Theory of Kingship," *Journal of the Society for the Study of Egyptian Antiquities* 13, 61-72.
- Johnson, J. H. 2000³ (1986): *Thus Wrote 'Onchsheshonqy: An Introductory Grammar of Demotic*, Chicago.
- Lambrecht, K. 1994: *Information Structure and Sentence Form*, Cambridge.
- Layton, B. 2011³ (2000): *A Coptic Grammar*, Wiesbaden.
- Mattha, G. and G. R. Hughes 1975: *The Demotic Legal Code of Hermopolis West*, Cairo.
- Pestman, P. W. 1985: "Le manuel de droit égyptien de Hermoupolis: les passages transmis en démotique et en grec," in P. W. Pestman (ed.), *Textes et études de papyrologie grecque, démotique et copte*, Leyde, 116-143.
- Polotsky, H. J. 1944: *Études de syntaxe copte*, Le Caire.
- Quack, J. F. 1997/98: Review of R. S. Simpson, *Demotic Grammar in the Ptolemaic Sacerdotal Decrees*, *Enchoria* 24, 171-177.
- Quack, J. F. 2006: "Zu Morphologie und Syntax der demotischen zweiten Tempora," *Lingua Aegyptia* 14, 251-262.
- Shisha-Halevy, A. 1989: "Work-Notes on Demotic Syntax, I," *Orientalia* 58, 28-60.
- Shisha-Halevy, A. 1998: "A First Structural Grammar of Demotic," *Bibliotheca Orientalis* 55, 587-600.
- Shisha-Halevy, A. 2002: "The Focalizing Conversion: Structural Preliminaries to a Chapter in the Grammar of Oxyrhynchite Coptic," in H.-G. Bethge et al. (eds.), *For the Children, Perfect Instruction: Studies in Honor of Hans-Martin Schenke on the Occasion of the Berliner Arbeitskreis für koptisch-gnostische Schriften's Thirtieth Year*, Leiden, 309-340.
- Simpson, R. S. 1996: *Demotic Grammar in the Ptolemaic Sacerdotal Decrees*, Oxford.
- Spiegelberg, W. 1906-08: *Die demotischen Denkmäler* (30601-31270; 50001-50022), II, *Die demotischen Papyrus*, Straßburg.
- Spiegelberg, W. 1914: *Die sogenannte demotische Chronik des Pap. 215 der Bibliothèque Nationale zu Paris nebst den auf der Rückseite des Papyrus stehenden Texten*, Leipzig.
- Spiegelberg, W. 1925: *Demotische Grammatik*, Heidelberg.
- Vandier, J. 1961: *Le Papyrus Jumilhac*, Paris.
- Vinson, S. 2010: "Ten Notes on the First Tale of Setne Khaemwas," in H. Knuf et al. (eds.), *Honi soit qui mal y pense: Studien zum pharaonischen, griechisch-römischen und spätantiken Ägypten zu Ehren von Heinz-Josef Thissen*, Löwen, 447-470.
- Widmer, G. 1999: "Emphasizing and Non-Emphasizing Second Tenses in the *Myth of the Sun's Eye*," *Journal of Egyptian Archaeology* 85, 165-188.
- Williams, R. J. 1948: "On Certain Verbal Forms in Demotic," *Journal of Near Eastern Studies* 7, 223-235.
- Zauzich, K.-Th. 1974: "Zu einigen demotischen Glossen im Papyrus Jumilhac," *Enchoria* 4, 159-161.
- Zauzich, K.-Th. 1976: "Die schlimme Geschichte von dem Mann der Gottesmutter, der ein Gespenst war," *Enchoria* 6, 79-82.
- 小山彰 2013:「コプト語サイド方言における焦点化転換の文焦点化機能：マルコ福音書の用例分析から」『オリエント』56/2, 37-52.
- 野田春美 1997:『「の(だ)」の機能』くろしお出版.